

df

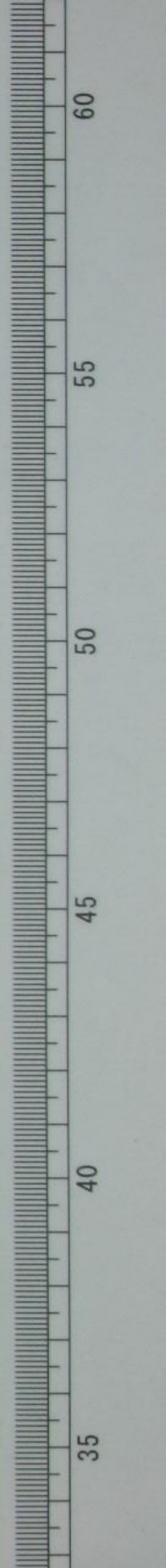
唐紙地獄

千景の地獄

書道は東洋の藝術だといふ。書道の巧拙の  
 相違が、かゝるたい自分なものである。名筆を見れば、  
 巧拙は外に、わけの藝術たなふと感心する。  
 書道の理論を流んで見ると、一種の繪畫だと  
 思ふし、實際、卓逸した書を見ると、繪畫に  
 感あつて同じ恍惚感に撲られるものがある。既  
 いこゝにあげれば、線の繪畫である。一体漢字  
 のものが、もともと、形勢をとりりるに象  
 徴して出来たものだから、あつた。書に  
 縁がないわけでは無い。たゞ繪畫は、  
 視覚に訴へる藝術である。文字は、意義を合  
 み、頭脳で味はう。それと反対するといふ  
 手間のかけ、機能に变化し、件力たので、形  
 形勢、由、觀、本、体、を、失、つ、て、了、つ、た、の、だ、ら、う、が、  
 めと書本が、翻めて、敏感な人間には、山とか、  
 川とか、あつたり、それと頭脳へ反対せよに、  
 すい、山の川に、対する、感情を、はうふうと思

No. 10-20

か、ん、た、け、い、の、情、景、  
 小川町 池田重太郎



い浮へ解るうゝ知れな。 厚紙に墨とらふ六  
 朝俣の文字をよき見ると、 だか、 汚んでる  
 味と解す。 文字であらう。 象徴の繪畫に  
 近り象徴の愉快と、 芝見すことか折らあ。  
 こんな偏疾氣論を、 我は時々思ひ浮べる。  
 書<sup>外</sup>だつて、 字の巧拙はあ。 ~~たか~~ 自体、  
 い文はは合いと感心するだらうが、 自体、  
 るれは、<sup>東洋</sup> 意義を持つた文はあ  
 はないのだから、 いくら目くとも、 技巧以上で  
 はない。 東洋の書道の巧に、 意義と技巧を

ね

味ふ意味の筆重はされな。 のた。 回サイン  
 を本めのは、 字の巧拙はあ。 筆者自身か  
 るれ、<sup>正統</sup> 明した意味は長何れ、 のであらう。  
 といつて、 書道が、 若い<sup>断</sup> 代に、 意義<sup>を失</sup> 和興く  
 らう。 行々現代及び現代以後の日本に、 どれ  
 ほど書道の意味が疎かか。 るれは解らぬ。  
 か、 <sup>余</sup> 余<sup>小</sup> 余<sup>白</sup> 余<sup>は</sup>、 またまた、 るれに對する意味  
 は、 一なり。 るれには、 日本<sup>の</sup> 住宅の構造も  
 肉保すものであらう。 長押や床の間の、 横  
 物を飾る必要があ。 問は、 るの、 意味か、 亦も

屏風の代ませや書畫紙をとり

風

小川町 池田家 遺墨

く続くであらう。が、床の間の飾り柄、張  
 まぜの<sup>治世のありさま</sup>花鳥の書畫は、これよりいかに  
 燈の情勢で、大した人々の<sup>第一書字は尚書に在りし。</sup>せりおのりまで、  
 床上の書畫を<sup>むすぶ</sup>めは、南に十<sup>おのり</sup>開口せよに、待  
 つてすしたといふ自信のあつた人達もあつた。たゞ  
 うが、地方人達も何かの<sup>おのり</sup>見聞もたなく、  
 のちろな陣笠にまで、筆と墨を押しけるのは  
 弱つた<sup>おのり</sup>風情味であつた。この時ほど、自信を持  
 つて、<sup>おのり</sup>卒業以上の書畫を書きあげた、<sup>おのり</sup>おの  
 り<sup>おのり</sup>輩達の存在が恨めしくなる。二つが<sup>おのり</sup>直に<sup>おのり</sup>か

書畫は、大抵、高貴人と限られ、このころ問題  
 ない。またか、<sup>文士は</sup>書を書けとは云はぬ。書を書  
 けと云ふのは困る。書たふ書けぬといふ。書  
 は、とに角、上手でも下手でも<sup>おのり</sup>書い  
 だ<sup>おのり</sup>上手でも、下手でも、書けぬ<sup>おのり</sup>理<sup>おのり</sup>はせ  
 てせうと<sup>おのり</sup>何<sup>おのり</sup>も<sup>おのり</sup>と、<sup>おのり</sup>全<sup>おのり</sup>く<sup>おのり</sup>おのり<sup>おのり</sup>の<sup>おのり</sup>用<sup>おのり</sup>が<sup>おのり</sup>だ、<sup>おのり</sup>降<sup>おのり</sup>来<sup>おのり</sup>す。  
 けれども、自分が書くのであつた。他人の  
 書い<sup>おのり</sup>て居るのを見ることが愉快である。こゝろと思  
 ふ、上手、下手にかゝり、人格、趣味の  
 ちま士しに出で居るから、<sup>おのり</sup>軍人<sup>おのり</sup>た<sup>おのり</sup>い。これ<sup>おのり</sup>か<sup>おのり</sup>味

小田町 池田書店

に、<sup>現代</sup>藝術界の筆蹟を見よの愉快である。 <sup>政中</sup>

年以上の政治家、學者は、他人の詩歌を書き

たぐ。 <sup>たぐ</sup> 意れも、櫻んだ詩歌に、よく、 <sup>わけ</sup> 3の

達、性格、知れぬわけにはないが、 <sup>現代</sup> 現代の文

士達は、所抱、 <sup>ル</sup> イ、イドでない。 <sup>自由</sup> 自由家

の文句、式には詩歌を書いた。 <sup>書</sup> くれに、

いつ習ったかと思ふほど。 <sup>上</sup> 上手だ。 <sup>書</sup> 書き馴れ

て、人見知りさくなく、たせいよ、 <sup>下</sup> 下手

たとへ、また、カ、學生生活のころに、 <sup>下</sup> 下手で、

は下手な、 <sup>風</sup> 風格が、士、 <sup>妙</sup> 妙だ。

か、 <sup>私</sup> 私の旅、行した市、町で、 <sup>文</sup> 文

士、 <sup>書</sup> 書の書、 <sup>書</sup> 書と飾らぬ、 <sup>書</sup> 書たのは、 <sup>書</sup> 書

い見、 <sup>書</sup> 書り、 <sup>書</sup> 書れ、 <sup>書</sup> 書個人、 <sup>書</sup> 書私、 <sup>書</sup> 書蔵、 <sup>書</sup> 書短冊、 <sup>書</sup> 書

書、 <sup>書</sup> 書帳に、 <sup>書</sup> 書隠し、 <sup>書</sup> 書た。 <sup>書</sup> 書

が、 <sup>書</sup> 書不、 <sup>書</sup> 書政、 <sup>書</sup> 書客、 <sup>書</sup> 書軍、 <sup>書</sup> 書人、 <sup>書</sup> 書行、 <sup>書</sup> 書ど、 <sup>書</sup> 書一、 <sup>書</sup> 書般、 <sup>書</sup> 書的、 <sup>書</sup> 書に、 <sup>書</sup> 書知、 <sup>書</sup> 書り、 <sup>書</sup> 書れ、 <sup>書</sup> 書

ぬ、 <sup>書</sup> 書せい、 <sup>書</sup> 書い、 <sup>書</sup> 書か、 <sup>書</sup> 書と、 <sup>書</sup> 書知、 <sup>書</sup> 書ぬ、 <sup>書</sup> 書今、 <sup>書</sup> 書春、 <sup>書</sup> 書

旅、 <sup>書</sup> 書館、 <sup>書</sup> 書へ、 <sup>書</sup> 書泊、 <sup>書</sup> 書た、 <sup>書</sup> 書

の、 <sup>書</sup> 書柳、 <sup>書</sup> 書幅、 <sup>書</sup> 書床、 <sup>書</sup> 書の、 <sup>書</sup> 書間、 <sup>書</sup> 書に、 <sup>書</sup> 書か、 <sup>書</sup> 書一、 <sup>書</sup> 書つ、 <sup>書</sup> 書こ、 <sup>書</sup> 書

題、 <sup>書</sup> 書に、 <sup>書</sup> 書を、 <sup>書</sup> 書井、 <sup>書</sup> 書勇、 <sup>書</sup> 書の、 <sup>書</sup> 書油、 <sup>書</sup> 書達、 <sup>書</sup> 書

か、 <sup>書</sup> 書床、 <sup>書</sup> 書し、 <sup>書</sup> 書か、 <sup>書</sup> 書つ、 <sup>書</sup> 書た、 <sup>書</sup> 書日、 <sup>書</sup> 書本、 <sup>書</sup> 書一、 <sup>書</sup> 書モ、 <sup>書</sup> 書タ、 <sup>書</sup> 書

高田は、 <sup>書</sup> 書柳、 <sup>書</sup> 書旅、 <sup>書</sup> 書館、 <sup>書</sup> 書も、 <sup>書</sup> 書日、 <sup>書</sup> 書本、 <sup>書</sup> 書一、 <sup>書</sup> 書文、 <sup>書</sup> 書格、 <sup>書</sup> 書の、 <sup>書</sup> 書モ、 <sup>書</sup> 書ガ、 <sup>書</sup> 書

く、 <sup>書</sup> 書す、 <sup>書</sup> 書り、 <sup>書</sup> 書と、 <sup>書</sup> 書

し、 <sup>書</sup> 書文、 <sup>書</sup> 書士、 <sup>書</sup> 書の、 <sup>書</sup> 書文、 <sup>書</sup> 書ま、 <sup>書</sup> 書の、 <sup>書</sup> 書活、 <sup>書</sup> 書